3 東大寺の大仏と利波臣志留志

大仏の造営と砺波

743（天平15）年、大仏造営が財政的に行き詰まっていたので、聖武天皇は全国各地の豪族に寄付をもとめました。砺波地方の豪族、**利波臣志留志**（礪波臣志留志）❶はこれに応じ、747（天平19）年に米3,000碩（石）（約180ｔ）❷を東大寺に寄付しました。この量は、河内国（現在の大阪府）の河俣連人麻呂と並び、全国第1位です。志留志の功績もあって、752（天平勝宝4）年に大仏の開眼供養が行われました。

東大寺の荘園

743年、米の生産量を増やすために「墾田永年私財法」が出されました。このことで貴族や寺院による土地の私有化が進み、日本各地に**荘園**❸がつくられました。砺波郡❹では8世紀中頃から土地の開墾が進み、東大寺の荘園が4ヵ所もつくられました。その荘園は、石粟荘、伊加流伎（伊加留岐村）、井山荘、杵名蛭荘といい、そのうち3ヶ所が現在の砺波市内につくられました。これらは、正倉院宝物である『東大寺開田図』などに描かれています。

767（神護景雲元）年、志留志は私有地100町歩（42.7万㎡）もの墾田を東大寺に寄付し、越中員外介（今の副知事）から伊賀守（今の三重県知事）に転じ、大出世をはたしています。このとき寄付した土地は、のちに井山荘となりました。

東大寺の荘園は、その後、10世紀ころまで続いたと考えられています。

❶利波臣の一族は、7世紀後半には利波臣氏を名乗り、小矢部川の中流域に本拠地があったと考えられます。
❷続日本紀に記される数字。東大寺の史料では5,000碩（約300ｔ）と書かれています。
❸「荘」とは私有地を経営するための事務所や倉庫のこと。このため私有地のことを「荘園」とよぶようになりました。
❹砺波郡とは、今の砺波市、南砺市、小矢部市、高岡市の一部を含んだ地域のこと。

LET'S WORK 10

なぜ、この場所に荘園がつくられたのか考えてみましょう。

東大寺の大仏
正式には盧舎那大仏といいます。

東大寺大仏殿
世界最大級の木造建築（奈良県奈良市）

久泉遺跡は荘園の西に位置しています。地中レーダ探査を行ったところ、遺跡から**大溝**が北東方向に約2kmにわたって続いていることが判明しました。人工的な溝は、荘園に向かって流れており、荘園を潤す農業用水路として機能していたことでしょう。遺跡からは「**溝所**」と考えられる溝の管理施設も発見されています。

発見された水田と溝

荘園に関連した遺構が見つかっています。荘園の推定地にあたる徳万頼成遺跡では平安時代の水田跡が見つかりました。石で固められた畦（あぜ）と水路、水田面には人や牛の足跡も残っていました。この発見によって、牛を使った稲作が荘園推定地の中で行われていたことがわかりました。

久泉遺跡からは、奈良時代から平安時代にかけての建物跡（掘立柱建物・たて穴住居）と大溝（おおみぞ）（大きな用水路）が見つかりました。大溝は幅が6～10ｍもあり、レーダ探査によって長さが2㎞も続くことを確認しました。久泉遺跡は、荘園のかんがい用水路とその管理施設と考えられます。

↑発掘された大溝　８世紀後半の用水路。人とくらべるとその大きさがわかります。（久泉遺跡）

↑石で固めた畦　平安時代の水田跡（徳万頼成遺跡）

東大寺領荘園（とうだいじりょうしょうえん）ってナニ!?

奈良時代後半から平安時代前期にかけて、東大寺が大仏完成後の寺院経営の基盤をつくるため、大面積の開発が可能で治水に便利な越中や越前の北陸を中心に国の許可を得て占有した田地。砺波郡と射水郡に４か所、新川郡に２か所。正倉院や奈良国立博物館などに絵図が現存する。